

京浜協同劇団と想いを共有する一場劇

「機密保護法二〇一〇」

にせんじゅう えつくす

作／栗木英章

“ かつて東芝労働者として十分な活動も  
しなかった贖罪の記 ”

出演

土井洋平	東洋電機	家電修理センター主任
中田秀一	同	原子力発電事業部長
須藤恵子	同	中田の秘書
黒川刑事	警視庁公安部	刑事
天野清	東洋電機	修理センター長
鈴木いよ	同	パートの清掃員

〈と き〉 二〇一〇年 初秋 午後  
〈と ころ〉 東洋電機 家電修理センター  
特別会議室

（尚「と ころ」は一応名古屋を想定しているが他県での上演場合、現地に合わせて対応可）

― 東洋電機家電修理センターの特別会議室をパートの清掃員鈴木いよがモップがけしている。やがて修理センター長の天野がケータイ電話で話しつつ登場。

天野

その、お言葉を返すようですが、地元中京新聞は中々手強くてですね、我が社の土地汚染は社会問題である——はあ、秘密保護法、そんな効き目はあるんでしょか——はい、わかりました。事業部長をお迎えしてから——はっ、すぐにですか——はっ、では、（腕時計を見て）土井洋平は午後三時にここ特別会議室へ来るよう命じておきます。——はい、直ちに——はい、失礼します（頭を下げて切る）やれやれ、そんなうまい具合に事が——（鈴木に気付いて）ちよつと。

鈴木

はっ？

天野

何してるの？

鈴木

お掃除ですよ。

天野

今日はもうすぐ来客が重要な来客があるから、い

鈴木

い、下がって。

天野

もう少しですから。

鈴木

いいと言っているの！

天野

はあ、（行きかける天野に）あの一

鈴木

この工場は、原子力何とかの研究所に変わるんで

天野

すか？

鈴木

君、どこからそんなことを——

天野

みんな知ってますよ、一軒一軒ビラも入っていま

鈴木

すし——

天野

わからんな、先のこととは。

鈴木

私ら、清掃パートは引き続き雇ってもらえるので

天野

しようか。

鈴木

わからん。

天野

・・・

鈴木

急いでるんだ。（走り去る）

天野

わからんて・・・センタ——長が知らんはずないで

鈴木

しよう。（ため息）掃除してない所、気になりま

天野

すから、後でやりますよ。（去る）

——しばらく無人の間

現場の方から作業用音楽が流れてくる。会議室の電話しばらくコールするが切れる。やがて話し声と共に中田・須藤・黒川が登場。

黒川

かつて二千人近く働いていた家電主力工場とは思

中田 今や拠点がない。  
 中田 遅れた三洋は吸収されたし、ソニーも風前の灯。  
 黒川 で、東洋は原電輸出というわけですか。  
 中田 ふふ：まあ国策だよ。  
 黒川 首相がトップセールスで売り込みに力を注いでいるようにですが、台湾じゃ10万人規模の反対デモが続いている。トルコでも――  
 中田 ふふ：時間だよ。  
 黒川 ？  
 中田 3・11といってもね、県知事選では結局福島県は原発推進の知事を選んだ。  
 黒川 50%以下の投票率でね。  
 中田 ：：公安は：シビアだな。  
 黒川 警察は常にリアルです。  
 須藤 （そつと）部長、御薬を――（ペットボトルと薬をテーブル上に用意する）  
 中田 ふむ。（薬を飲む）  
 黒川 では私は、土井洋平なる人物が、この土地汚染を内部告発した犯人かどうかを探ればいいんですね。  
 中田 さぐるというか：引張れるかどうか。  
 黒川 まっ、秘密保護法でいけば状況証拠だけでひっぱれますがね。  
 須藤 あの：  
 黒川 私に？何だね。  
 須藤 そんなことできるのですか？  
 黒川 防衛につながることは全て秘密なんだよ。私はこちらの覗き部屋へ引っ込みますよ。（小ドアを開けて点検しながら）さすが、かつての大争議をくぐり抜けてきた東洋さん、よく考えられていますな。（小ドアを開けて、すうっと消える）  
 中田 君はここにいて記録をとってくれ。  
 須藤 はい。（座ってノートパソコンをセットする）  
 中田 （無意識のうちに腹部をさわっている）  
 須藤 大丈夫ですか？  
 中田 ふむ。

須藤 一日も早く手術された方が――  
 中田 もうすぐ株主総会だ。取締役には推挙されますよ。  
 須藤 病気とわかってても、取締役にはそんな甘い  
 中田 わかっている。企業というのはそんなに甘い  
 須藤 い。原発の輸出を実行する大事な局面で、甘い  
 中田 がんステージの人間をセンターのポストにつけ  
 須藤 るはずがない。  
 中田 でも、御体の方が――  
 須藤 もうその事には触れるな。  
 中田 須藤へは。――  
 須藤 君はかつて土井の部下だったな。  
 中田 はい、あの方が技術課長だった頃。  
 須藤 ふむ。優しい上司だったんだろうな。  
 中田 須藤は。部長は土井さんと大学時代から――  
 須藤 （頷いて）成績抜群の上に多趣味な男で――少  
 中田 なつかしく入学しはがりの頃かな、つま恋の才  
 須藤 ーナルナイトコンサートに誘われて、拓郎を歌った  
 中田 よ。  
 須藤 吉田拓郎さんも肺ガン手術して全国ツアーに復帰  
 中田 してますよ。  
 須藤 。（ポツンと）今日までそして明日から――（見  
 中田 める須藤に気付いて）全て過ぎたこと、振り返っ  
 中田 ていては、前へ進めぬ（時計を見て）時間だな。  
 須藤 二人はドアを見つめる。  
 中田 ドアのノック。土井が入ってくる。  
 土井 土井です、失礼します。  
 中田 よっ、元気そうだな。  
 土井 ごぶさたしていません。部長もお変わりなく――  
 中田 まあ――ふむ、その部長、土井君というのも話し  
 土井 にくいな。昔のように洋平・中田で話していいだ  
 中田 ろ。  
 土井 どうぞ。  
 中田 今日は君に二つ頼みがあった。――  
 土井 ご苦労様です。（須藤に気付き一礼）  
 中田 ズバリ言おう。原子力事業部に戻らんか――いや  
 土井 戻ってくれんか。  
 土井 戻ってそれは原発開発から離れるとき申し上げた通

中田 わかっている。当時技術課長だった洋平の安全設  
 計をことごとく没にしたのは私だ。コストとデリ  
 バリーの制約からやむを得なかった。  
 中田 だが福島原発事故では見事に君の予測はあたっ  
 た。  
 中田 今度ベトナムや中国に我が社の原発を輸出するこ  
 とが内定した。設計のベテランで、地質学も身に  
 つけ、おまけに語学に堪能な洋平が必要なんだ。  
 中田 プレイング・マネージャーとしてどうだ。今度は  
 俺も全面的にバックアップする。  
 土井 買い被らないでください。日進月歩の技術の世界  
 で、私なんかもう役に立たない中古車です。設計  
 なら、私とチームを組んでいた沢村、武内、池上  
 たちがいるじゃないですか。  
 中田 その道一筋のオールマイティが欲しいんだ。  
 土井 私は今、この修理工場の仕事にやり甲斐と誇  
 りをもっています。今まで電子パーツの故障はそ  
 っくり坊主変えしていましたが、調べれば一部品  
 の交換で再び動き始めます。工場の修理マンもそ  
 れがわかり生きいきと。  
 中田 洋平。その成果は社内報で読んだ。だがな……  
 （テーブルの水を飲み）ここは来年度、原発の  
 開発ステーションになる。  
 土井 家電の修理はどうなります、東洋の看板を背  
 負ってきた顧客サービスは？  
 中田 そんなモノ、大手の家電販売店に押し付けられ  
 い。頼む。俺を助けてくれ。  
 土井 頭を下げる中田を見て、土井は須藤を見るが、  
 須藤は眼を伏せる。  
 土井 頭を上げて下さい。  
 中田 この地元なら、洋平が心配するおふくろさんの介  
 護もできる。給料も大幅アップだ。頼む、受けて  
 くれ。  
 土井 ……あまり蒸し返したくないんですが、私は原発

開発に反対、ましてや今の危険な仕様のものを海外へ輸出するなんて許し難いことです。

中田

洋平――ご期待に添えず、申し訳ない。

土井

その意志は固いんだな。

中田

(頷く)

土井

(態度が急変し) そのために、この土地汚染を内部告発したか。

中田

いいえ。

土井

あんな詳しい告発書は、地質に詳しいお前でなければできないことだ。

中田

汚染は三〇年ほど前、プレス部品の油取りにトリ

土井

クレンを使用して垂れ流していたツケがまわって

中田

きたもので、工場中衆知のことですよ。

土井

しかし(須藤から書類を受け取り)「ゴールデンウ

中田

イークの連休中に、工場へ入り込んだ人物が監視

土井

カメラ写っている。(写真を示し) これは洋平だ

中田

ろ。

土井

(見る)

中田

あの連休に守衛以外工場へ入ったのはお前一人

土井

だ。その時、突貫工事で行っていた汚染処理現場

中田

を見たんだろう。

土井

：：確かに現場から大きなポンプ音が聞こえたの

中田

は覚えていますが、私は自分の机からメモを取り

土井

出しただけです。

中田

メモだと。その為になんかわざわざ連休に出てくるか。

土井

それは：：困ったな。

中田

隠すな。

土井

否、事業部長にお話するようなことじゃないんで

中田

す、ほんと。

土井

正直に言え！

中田

：：なら、私、おふくろの介護施設などでボラン

土井

ティア活動して：：メモというのはその日の

中田

夕方やる予定の落語のネタメモなんです、忘れて

土井

しまっただけ。

中田

洋平が落語：：(笑い)嘘はもっとうまくつくも

土井

んだ。

中田

いえ、ほんとです。

土井

(須藤に)君、信じられるか。

中田

土井

中田

須藤

中田

土井

中田

土井

：：もしかして：：真面目な土井さんの人柄で温かいお話が！（時計を見て）では、その落語とやらを見せてもらおうか。いえ、それは後日ということ勘弁してください。き、現場に戻ります。（厳しく）やれ！（戻って水を飲む）

：：やらなければお前が告発者と認定するぞ。従業員規則違反で即刻クビだ。

—長い間

土井

：：ではさわりだけ。（床に座って）ええ、コンニチワ、またまた下手くそなお話でちよいとお耳をお借りしますよ。おい、ハつつあん堀を作ったかい。へい。なんてね、堀とへい、同じ言葉でも意味が違いますな。皆さん、盆、正月にお孫ちゃんなんぞ集まっつて、じじい、ばばあと呼ばれたりすると、ちよつとばかし頭へきますな。ところがこれがじいじ、ばあばとなりますと、ニコつとしてついサイフからお年玉を出してしまふ：：

中田  
土井

（無言でうながす）  
似たような言葉で、違うよう根っこがつながつてゐるってえのあります。例えば：（心を定め姿勢を正し）原発と原爆、片方は電気、もう一方はいまわしい原子爆弾。ところがこれが核兵器開発でつながっている。原発が一つも動いてなくても猛暑を乗り切ったのに、なぜ危険な原発を再稼働させようかと必死になったり、海外まで輸出しようとするのか、それはいつでも原爆を開発できるよ

中田  
土井

もういい！  
：：お粗末様でした。

中田  
土井

洋介。あとの方は即席でつけ足したな。  
原子力開発事業部長の中田さんに直接訴えたくないまして、はい。お前は今、どういう立場におかれてるか、承知しているのか。

土井 あなたは、どういふ立場なのか承知しています

か。

中田 なに？！

土井 3・11の原発事故で、まだ古里へ帰れない人が

一〇万人以上いるんだぞ。私は贖罪のため、東北

へ行ってささやかなボランティアを続けている。

中田 先日も浪江町の「希望の牧場」へ行ってきた。

土井 もういい。

最後まで聞け。放射能を浴びた牛は殺せと言われ

る中、牧場主は被爆しつつも、放射能被害の生き

証人として三百頭の牛を飼い続けている。その姿

を見て自分はあらためて心に刻んだ。原発を許さ

ないと。

中田 相変わらずの感傷だな。

土井 一人の人間としてのまっとうな感情だ！

中田 現場へ戻れ。

土井 少々興奮した。失敬。(行きかけて)少し顔色が

悪いぞ。

中田 失礼します。

土井 中田は少しよろめく。

中田 大丈夫ですか(支える)

須藤 俺も：興奮したようだ。

中田 | 中田は残った水を飲みほす。

黒川 黒川刑事が出てくる。

中田 葬るには惜しい才能だが：。

黒川 今の話でしよつぴけるでしょう。

黒川 秘密保護法はね、本人が言うことなら

い。早い話、辺野古基地建設反対運動の連中には

刑事特別法を適用した。つまりは、社会の秩序を

乱す恐れのある犯罪ということだ。君に説明する

中田 事ではなかつた。

黒川 これは、予定通り。

中田 中田は残った水を飲みほす。

黒川 黒川刑事が出てくる。

中田 葬るには惜しい才能だが：。

黒川 今の話でしよつぴけるでしょう。

黒川 秘密保護法はね、本人が言うことなら

い。早い話、辺野古基地建設反対運動の連中には

刑事特別法を適用した。つまりは、社会の秩序を

乱す恐れのある犯罪ということだ。君に説明する

中田 事ではなかつた。

黒川 これは、予定通り。

中田 中田は残った水を飲みほす。



中田 よろしくお願ひします。  
黒川 それはそうと、顔色が悪いですな。  
中田 ちよつと、風邪気味で。  
黒川 荒療治には、こちらの気力と体力が不可欠ですか  
らくれぐれもご用心を。

―工場の遠方から「土地汚染を隠すな！」「原発  
反対」などのシュプレヒコールが近付いてくる

中田 あれは―  
黒川 ウジはどこにでもわいてくる。  
中田 しかし、「原発反対」とは―

人の口に墾はたてられませんか。大丈夫、監  
視カメラで全員の顔写真はとつてある。いづれ始  
末しますよ。

中田 秘密保護法様々ですな。  
黒川 経団連の政治献金の成果でしょ。では。（去る）

―中田はぐったりと座り込む。

須藤 お疲れですね。（水を用意する）

中田 なぜだ？！

須藤 はっ？

中田 なぜ洋平は動じない！

須藤 ！

中田 こんなおいしい話を―クソツ！

―シュプレヒコール近づいてくる。

須藤 （議事メモを打ち出して）はい、今の発言記録で  
す。

―中田は茫然としてシュプレヒコールに聞き入  
る。ドアをそつと開けて鈴木が顔をのぞかせる

鈴木 失礼しました。

中田 何だ。

鈴木 何？

中田 何の用だ。

鈴木 先程床掃除をし残した所がありますので、あの、

あとで参ります。

やればいい。

中田 はい。ではご無礼します。

鈴木 | 鈴木はおそろおそろ入ってきて、残った床掃除をする。

中田 あの、外の騒ぎはいつ頃から始まった。

鈴木 はい：先月くらいからですか、毎週金曜日に。

中田 毎週？

鈴木 はい、それがどんどん人が増えてー

中田 ふむ：・

| 夕日が部屋を赤く染める。

無言の中田、それを心配気に見守る須藤と掃除

に打ち込む鈴木。

シュプレヒコールだんだん大きくなってー

F・O